

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳についての断章

山岡洋一

- 翻訳はどこに行くのか

21世紀の翻訳の可能性は目の前にある。村上博基や長谷川宏らの翻訳で、深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけを与えてくれる本物の本がたくさん読まれるようになれば、翻訳文化の新しい時代がはじまるだろう。

名訳

須藤朱美

- 芝山幹郎訳『ニードフル・シングス』

芝山幹郎訳『ニードフル・シングス』を読んだときの衝撃をどう表現したらよいのか。ここはひとつ、わずらわしい御託をならべるまえに例を挙げて、その衝撃を存分に味わっていただこう。

ひとさまの誤訳(第1回)

柴田耕太郎

- 斎藤兆史著『英語達人塾』

誤訳を論ずるとなると、鬼の首をとったかのごとき執筆者のひとりにはしゃぎか、陰湿な嫉妬・いじめになりがちだが、ここはひとつ「お互い自分の恥ずかしい誤訳を見せあって笑い飛ばす場があったらよい」との河盛好蔵の言を是とし、翻訳関係者の滋養強壮になるよう、翻訳まわりの諸問題を前向きに考えてゆきたい。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

翻訳はどこにいくのか

3月号と4月号で明治初期の翻訳を紹介した。翻訳の歴史が面白いからでもあるが、それ以上に翻訳と出版の現状を考えるときの材料にしたいと考えたからだ。

翻訳、とくに出版翻訳の現状は決して芳しくはない。かなり悪いといってもいいほどだ。本が売れない。出版翻訳を職業にしているものの立場からいうなら、本が売れないということは直接に生活にひびく大問題だが、それだけではない。大げさにいえば、出版翻訳は日本文化を縁の下で支える役割を担っており、明治初めから150年近くにわたって築きあげてきた翻訳出版の文化は、日本が世界に誇れるもののはずだ。翻訳を通じて古今東西のすぐれた知識や考え方を学ぶ姿勢をとってきたからこそ、いまの日本がある。この姿勢が衰えてきたとするなら、日本文化全体にとっても、ひいては日本という国にとっても問題だといえる。そんなことまで考えるから、翻訳出版の現状を大きな視点からみてみたいと思う。時代をさかのぼって、いまの時期を歴史のなかに位置づけてみようとする。

本が売れないのは出版業界全体の問題なので、出版関係者の間で話題になることが多い。いまの時期を歴史のなかに位置づけてみようとするのは、本が売れない原因として出版関係者の間で指摘されている点に納得できないからである。たとえば、若者は携帯にカネを使うから本が買えないという。図書館で無料で本を貸しているのが悪いという説もある。新古書店があるから新刊が売れないという説もある。いまの若者は本を読まないという話もよく聞く。どれも、原因というより言い訳というべきなのではないかと思えてならない。また、これらが原因だとすると、解決策がでてこない。愚痴にはなっても、前向きの話にならない。

ベストセラーの功罪

少しは前向きらしく思える見方もある。それでもベストセラーはあるという見方だ。たとえば、空前のヒットになった小説もあるし、インターネットで生まれた本のなかから10万部以上売れるものがでてきた。翻訳書でも、ごく少数だが、大ヒットになっているものがある。こうした本には「読みやすくわかりやすい」という共通点がある。こういう本が売れている現実を認識し、市場が求めている本を作るべきなのに、昔ながらの感覚で古臭い本を作っているから売れない

のだという見方だ。

出版翻訳に取り組むようになったころ、翻訳書にしる、日本人の著者によるものにしる、ベストセラーはなるべく読むようにしていた。どのような本が売れているかを知り、なぜ売れているのかを考えておくのは、出版に関係する仕事をする以上、当然だと考えたからだ。それに編集者と話すときに恰好の話題になる。だが、この何年か、ベストセラーはめったに読まなくなった。立ち読みで何頁か読むことはあっても、読みつづける気持ちになれない。読書はカネはあまりいらぬが、時間を使う娯楽だ。そして時間は、いまの世の中でたいていの人にとっていちばん希少な資源のはずだ。時間という希少な資源を使う以上、深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけなどを与えてくれる本を読みたい。10年前には少し違っていたように思うが、いまではベストセラーのほとんどがそういう本ではない。だから、ベストセラーがあるといっても、出版業界の将来にとって、少しも明るい材料にはならないように思えてならない。

そういう感想を出版業界の人に話したことがある。すると、こうたしなめられた。いまのベストセラーはたいてい、本を買うのははじめてとか、久しぶりとかの人に読まれているのだから、あれでいいのだ。ああいう本を読んで、読書の楽しみがわかれば、もっとしっかりした本を読んでもくれるようになるのだから、馬鹿にははいけないという。

こういう話を聞くと思い出すことがある。自宅の近くにパン屋が開店した。目につく場所に目につく建物を建てていたし、開店前に派手な宣伝もあったので、開店の日は大盛況になり、長い長い行列ができた。行列があると並んで買ってみたくするのが人情だ。美味しいパン屋がないという不満もあったので、列の後ろに並んで買ってみることにした。ようやくパンを買い、翌朝に食べて失望した。高いのに美味しくないのだ。そうなると、店員がいかにも無愛想だったことまで思い出されて、腹がたってきた。たぶん、同じように感じた人が多かったのだろう。3日もすると行列はなくなり、やがて閉古鳥が鳴くようになった。1年ほどたったある日、閉店のお知らせがドアに貼られていた。

開店の直後にあれだけの行列ができたのだから、大ヒットだった。店の人たちは嬉しかったはずだ。大ヒットを生み出した要因はいくつかある。何よりも立地が良かった。周囲に強力な競争相手がなく、しかも人通りの多い目立つ場所だったからだ。それに建物が人目を引くものであった点も良かった。工事中にも、どんな店ができるのか、楽しみにしている人がたくさんいたはずだ。そして派手な宣伝が効いた。ところが、開店直後にあれだけ集まった客のうち大部分の人は、また買いに行こうとは考えなかった。高いと思ったのか（価格設定を間違えたのか）、不味いと思ったのか（商品の質が低かったのか）、店員の態度に腹を立てたのか（サービスに問題があったのか）、別の理由があったのかはわからないが、ともかく、開店直後の大盛況で悪評だけが残ったようなのだ。こうなると、宣伝をしても客は集まらない。

読みやすくわかりやすいという触れ込みの浅薄な本で、同じことにならないという保証はどこにもない。はじめて本を買った人、久しぶりに本を買った人のうち、どれぐらいの人が別の本を読んでみようと思ってくれたかはわからない。数十万部の大ベストセラーになったからめでたいと思っていたら、数十万人がもう買わないと考えている可能性だってあるのだ。

はじめての人、久しぶりの人にはとくに、本物を買ってもらいたいと思う。深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけなどを与えてくれる本を読んでもらいたいと思う。読みやすくわかりやすい本が売れているのだから、そういう本を訳せばいいとは考えない。開店の日に行列ができ、翌週からは閉古鳥が鳴くパン屋のようにはなりたくないからだ。

1970 年前後からの長期低落

本が売れないといわれるようになったのはここ数年のことだが、実際にははるか以前から本の売れ行きは低落傾向をたどっていた。出版社は売上の伸びを確保するために点数を増やしていたので、問題がそれほど深刻にはなっていなかった。数年前からは 1 点あたりの売れ行きが急速に悪化して、点数を増やしても売上を確保できなくなり、書籍の市場が縮小に転じるようになった。出版関係者の間で本が売れないといわれるようになったのは、そのころからだ。

では、長期低落傾向がいつごろからはじまったのかというと、おそらくは 1970 年前後からである。当時はいまとは比較にならないほど本が売れ、翻訳書が売れていた。出版各社が世界文学全集や世界思想全集を

競ってだしていた。なかでも象徴的なのは、ニーチェの『ツアラトウストラ』の新訳が馬鹿売れしたことだ。70 万部売れたとされているのだから、驚異的だ。この時代にはニーチェだけでなく、難しい本、硬い本を読むのが流行になっていたのだ。

70 年前後にはとくに、欧米の名作の翻訳がよく売れた。浅薄な本が売れていたのではない。深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけを与えてくれるはずの本、つまり、読書というからにはこういう本でなければと思える種類の本が売れていた。各社が競って世界文学全集や世界思想全集をだしたのは、そういう本が売れたからなのだ。

当時を振り返り、その後の出版業界の動きをみていくと、この 35 年ほどの間に出版業界も、読者も、そして世の中も墮落してきたといえるかもしれない。当時の出版社や編集者は志が高かったし、翻訳者もお手軽な本なんぞに目もくれず、名作を訳していたのだから、いまの翻訳者とは格が違うといえるかもしれない。当時の読者は知的な好奇心が旺盛で、ヘーゲルやマルクス、ドストエフスキーやカフカらの難解な本を必死になって読んだのだから、いまの読者よりはるかに質が高かったといえるかもしれない。だが、こういう見方は酒場の片隅で憂さを晴らすときには恰好だとしても、将来を考えるとときの指針にはならない。

もう少し広い視野から問題を考えてみたい。過去 35 年ほどの書籍市場の動きは、経済の動きを見慣れている人がみれば、典型的な長期波動だと思えるはずだ。たとえばインフレ率の長期波動をみると、70 年代から 80 年代初めまでをピークに、徐々に低下するようになり、90 年代末には低下の勢いが急激になり、とうとうデフレが問題になるまでになった。長期波動では、徐々にじまった動きが急激になって終わり、反転の動きがはじまることが多い。だから、本の売れ行きが急速に落ちているのは、ひょっとすると良いことなのかもしれない。もう少しで反転する兆しである可能性があるのだ。だが、経済の動きをみると、そうなるとは限らないことがわかる。低落傾向がさらに長期にわたって続き、予想もされなかったほど谷が深くなる可能性だってある。

過去 35 年ほどの書籍市場の動きが長期波動だとはかぎらないのだから（つまり、いずれ反転するものだとはかぎらず、どこまでも低下を続ける可能性もないのだが）、これが波動だとすると、70 年前後にピークをもたらした要因、「難解な」本、とくに翻訳

書が大量に売れたことが、その後の長期低落をもたらした要因になったはずである。いま、「読みやすくわかりやすい」本、つまり、当時とは正反対の性格の本が売れるとされていることをみれば、まず間違いなくそうだと考えられる。パン屋の開店の直後に行列を作った人たちと同じように、当時の流行に乗って難しい本を買った人たちが読者層として定着するどころか、逆に本を敬遠するようになったはずである。当時の本は、もうこりこりだと読者に思わせるものだった。そう考えるのが順当だ。

この 35 年ほどの間に出版業界も、読者も、そして世の中も墮落してきた、いまだきの若者は本を読まないと嘆く人もいるだろうが、世の中の動きにはかならず合理的な面がある。墮落してきたのではなく、成熟してきたといえる面があるはずだ。

たとえば、こういう点を考えてみるべきだ。70 年前後に難しい本が売れた背景には、権威への盲従があった。すばらしい本だから売れたというより、権威ある人たちが訳し、権威ある人たちが権威ある本として勧めた本が売れたというべきなのだ。その一方で、70 年前後はそれまで絶対の権威とされてきたものが権威を失った時期でもある。とくに学者や小説家など、文化人と呼ばれていた人たちの権威が失墜した。権威あるとされてきた人たちが実際にはそれに相応しいものをもっていないことを見抜き、権威に盲従しなくなったのは墮落ではなく、成熟である。

そしてもうひとつ、翻訳に直接に関係する点を考えてみるべきだ。当時の翻訳書が「難解」だったのは、なによりも当時の翻訳の性格に問題があったからだ。当時、権威ある人たちの権威を支えていたのは、直接には大学教授などの肩書きだが、権威ある肩書きは欧米という理解などとてもできないほど遠く進んだ社会、理想の社会から、とてつもなく難しい知識や思想を学んでいることを示すものだと言われていた。「難解」であることが権威を支えていた。「難解」なほど権威が高まる仕組みになっていた。そうなっていけば、権威ある人たちが翻訳に取り組むときに、無理にでも「難解」な訳文にしようという心理がはたらくのは避けられない。だから、日本語で翻訳書を読む読者が理解できるか訳文になっているかどうかは、当時の翻訳者にとってたいした問題ではなかった。理解できないに決まっているという意見すらあった。

もちろん、当時の翻訳書がすべてそうだったというのではない。そういう翻訳が当時の主流だっただけだ。

だが、問題は当時の主流がどうだったかであって、一部にすばらしい翻訳があったかどうかではない。当時の主流の考え方では、翻訳にあたって使う文体は、通常の日本語の文体とは違っていた。原語と訳語を一对一で対応させ、原文の構文をできるかぎり忠実に再現するのが翻訳の正しい文体だと考えられていた。翻訳に使われる翻訳調という文体が確立していた。翻訳調は日本語ではない。日本語もどきだ。

3 月号と 4 月号で明治初期の翻訳を取り上げたのは、この翻訳調ができる前の翻訳がどうであったかを紹介したかったからだ。中村正直の『自由之理』の文体は、翻訳調ではない。原語と訳語の一对一対応も追求していない。たとえば society という言葉の意味を必死になって考え、さまざまに訳し分けた形跡が歴然としている。柳父章が『翻訳語成立事情』（岩波新書）などの著書で論じているように、その後、「社会」という訳語が定着すると、翻訳にあたって原文の意味を必死に考える必要がなくなった。「社会」という訳語は、原文のこの部分に society という語があったこと以外には、何も示していない。語の意味はわからない。その文の意味もわからない。わかっているのは、ここに society という語があったことだけ。意味は読者の皆さんが考えてください……。そういうメッセージを伝える訳語なのである。だからこそ、翻訳書を読んでも理解などできるはずがないという常識があったのだ。

だから 70 年ごろ、深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけを与えてくれるはずの本が売れていたというのは、あまり正確ではない。正確には、深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけを与えてくれるはずの原著を訳した意味不明に近い訳書が売っていたというべきなのだ。長い行列に並んで、高く不味いパンを買ってしまった人と同じように、そんな本を買い、時間をかけて苦労して読み、読んでも理解できない自分はよほど頭が悪いのだろうかという苦しい思いだけが残った人たちが、ああいう本はもう買わないと考えたとしても、不思議はないのではないだろうか。

21 世紀の翻訳の可能性

過去 35 年ほどの書籍市場の動きが典型的な長期波動の下降局面だとすれば、最近の落ち込みが急激であること以外にも、反転の時期は近いと思わせる事実がある。下降局面や上昇局面の最後には人びとの見方が極端になるのが普通であり、現在はまさにそういう状況になっている。

たとえば、70 年ごろに権威に盲従した面があった

にせよ、難しい本を読もうとする人が多かったのは、知的な好奇心が旺盛で学習意欲が強かったからだ。いまではこれが完全にといってもいいほどに逆転している。反知性主義が極端になった。文部科学省が知的な好奇心と学習意欲を嫌い、学校の教師が知的な好奇心と学習意欲を嫌っている。70年前後の有名大学に代わって権威の源泉になったのはテレビを中心とするマスコミであり、知的な好奇心と学習意欲を馬鹿にし、からかうようになっている。本来なら知的な好奇心が旺盛な読者を大切にせず出版業界すら、読みやすくわかりやすい本、言い換えれば内容のない浅薄な本を粗製濫造するようになった。

だが、知的な好奇心は、人間なら誰でももっているものだ。知らなかったことを学ぶのは楽しいし、難しいことを学ぶのは嬉しいという感情は誰でももっている。マスコミで馬鹿にされようが、学校の教師に抑圧されようが、知的な好奇心を完全に押さえつけることはできない。機会をみつけてかならず噴出して来る。その証拠がみれば、塾に通う子供たちの表情をみてみればいい。文部科学省や教師、政治家やマスコミが目の敵にする塾、その塾に通う子供たちはいきいきとしている。夜遅くまで塾にしばりつけられて、子供たちが可哀相だという人たちは勘違いしているのだ。可哀相なのは、昼間の時間に勉強を嫌う学校、学ぶことを嫌う学校、知的な好奇心を押さえつける学校に無理やり通わされていることなのだ。いまでは、学習意欲を大切に、知的な好奇心を刺激してくれるのは公教育ではな

い。塾や予備校をはじめとする民間の教育産業なのだ。

反知性主義が極端になれば、振り子が自然に反対に振れるようになる。書籍市場についていうなら、たしかに読みやすいし、たしかにわかりやすいが、知的な好奇心を刺激するようなことはほとんど何も書かれていない本ではなく、深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけを与えてくれる本物の本を求める人たちが少しずつ増えてくるだろう。そして、本物の本が出版され、読書の素晴らしさを知った人が増えてきたときに、つぎの上昇局面がはじまるのだと思う。

だが、そのときに、35年ほど前に売っていたような本が売れるようになるとは思えない。翻訳についていうなら、対象になる原著は同じでも、翻訳のスタイルは大きく違っているはずである。歴史は繰り返すとしても、まったく同じ形で繰り返すわけではない。

翻訳のスタイルが様変わりすると考える理由のひとつは、社会状況の違いだ。中村正直らの明治初期の翻訳も、それに代わって20世紀に使われた翻訳調の翻訳も、どちらも欧米がはるかに遠かったという事実を背景にしている。地理的にも心理的にもはるかに遠かった。欧米には日本のものとはまったく違う社会があり、はるかにすぐれた知識や考え方があると思われていた。理解することなどとてもできない進んだ知識や考え方的一端でも、なんとかつかみたいと必死に努力するときに使われたのが、翻訳調なのだ。いまでは欧米は心理的にはるかに近い。理解できるはずのないものではなく、理解できるはずのものとして、欧米の名作を読むことができる。そういう社会条件が整っている。欧米の知識や考え方を理解したうえで、その内容を日本語で伝える翻訳が可能になっている。

翻訳という観点からは、そういう芽はずでにある。35年ほど前にも、主流以外のところには、すでにそういう翻訳があった。たとえば、「翻訳通信」の2003年8月号で紹介した村上博基訳『女王陛下のユリシーズ号』がまさにそうだ。翻訳調が主流だった1960年代後半に、翻訳調ではない見事な日本語で訳している。そして、村上博基は日本の翻訳の歴史のなかで突然変異のような存在だというわけではない。明治時代から、たとえば森鷗外らに代表される翻訳の流れがあり、それを受け継いでいるのである。

70年前後に時代にも、その後しばらくも、翻訳調ではない翻訳は主に、エンターテインメント小説の分野で、つまり学者が関与しない傍系の分野で行われて

Google

安藤 進 著
1,470 円 (税込) A5 判・148 頁
ISBN 4-621-07429-6

2

Google

好評発売中
翻訳に役立つ Google 活用テクニック
安藤 進 著 1,680 円 (税込) ISBN 4-621-07294-3

丸善株式会社 出版事業部
〒103-8245 東京都中央区日本橋 2-3-10
TEL 03-3272-0521 <http://pub.maruzen.co.jp/>



きた。いまでも、出版翻訳のなかですぐれた翻訳者の層がもっとも厚く、翻訳の質がもっとも高いのは、間違いなくエンターテインメント小説の分野だ。

学者などの学界の人たちが翻訳の中心になっている分野ははるかに遅れている。たとえば同じ小説でも、大学の英文科や仏文科、独文科などで研究対象になる部分では、いまだに翻訳調が幅をきかせている。抱腹絶倒の物語が、重々しく難解に訳されていたりする。自然科学、社会科学、人文科学などの分野はもっと遅れている。だが、この分野にも新しい動きはある。

たぶん、翻訳の新しい可能性を示したという意味で、とくに重要なのが長谷川宏のヘーゲル訳である。「難解な本」のなかでも極めつきだと思われていたヘーゲルの著作を、少なくとも読んでみようと思える普通の日本語で訳したのだから、衝撃は大きかった。たとえば、以下の2つの訳を比較してみるといい。

第一部 抽象的な権利ないし法

§ 34 即自かつ対自的すなわち絶対的に自由な意思が、その抽象的な概念のうち有るばあい、それは直接性という規定されたあり方をしている。
(ヘーゲル著藤野渉・赤沢正敏訳『法の哲学』中公クラシックス 139 ページ)

第一部 抽象的な正義(法)

§ 34 絶対的な自由意思は、抽象的概念としてとらえられるとき、ただそこにあるという形で存在する。
(ヘーゲル著長谷川宏訳『法哲学講義』作品社、628 ページ)

ここで目立つのは、「即自かつ対自的」という訳語がないことだ。ヘーゲル哲学というと「止揚」とともに真っ先に思い浮かぶはずの「即自かつ対自的」がないのだ。原語と訳語の一対一対応という金科玉条をきれいに捨てて、原著の意味を日本語で伝えようとしているのである。いまでも、この翻訳では an und für sich の意味がわからないではないかという人もいる。そう思うのであれば、原著を読めばいい。翻訳の本来の任務は、原文がどうであったかを示すことではなく、原著の意味を日本語で伝えることにこそある。翻訳書を読んでも理解などできるはずがないという常識を覆して、原著を読んで理解した結果を日本語で伝えるのが翻訳だという、いってみれば当たり前のことをしているのが、長谷川宏の翻訳である。

21 世紀の翻訳の可能性はすでに目の前にある。70 年前後に流行したものと違った形で、村上博基や長谷川宏らの翻訳で、深い感動、豊富な知識、深く考えるきっかけを与えてくれる本物の本がたくさん読まれ

るようになれば、次の上昇局面に入れるのではないかと思う。

次の上昇局面がはじまる可能性を示す事実がもうひとつある。それは高齢化社会だ。高齢化社会というと、かならずといってもいいほど、マイナスの面ばかりが強調される。だが、高齢化社会とは高齢になっても元気に暮らせる社会なのだ。少し見方を変えれば、これほどめでたいことはない。高齢の人たちは時間をたっぷりもっている。アダム・スミスは晩年に、「若いころに親しんだ本を読みなおすことが最大の楽しみだ」と語っている。そういう人が今後、かなり増えるのではないだろうか。幸い、70 年ごろに若者だった人たちが今後、引退生活を送るようになる。若いころに親しんだ本を読みなおしたいという人がかなりの数になっても、不思議ではない。

いまは若者文化が盛んなので、出版業界でもどうすれば若者に売れる本が作れるかばかりを考えているようなところがある。だが、団塊の世代が引退生活を楽しむようになれば、この世代が書籍の大きな市場になる可能性もあるのだ。

英語を学びなおしたい人にとって絶好の再入門書

翻訳力錬成テキストブック

柴田メソッドによる英語読解

柴田耕太郎著

定価 10,290 円 (本体 9,800 円) A5 版・680p

課題の例文は定評ある 100 編の名文を選定
実践的な翻訳技術養成講座

日外アソシエーツ

〒143-8550 東京都大田区大森北 1-23-8

TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845

芝山幹郎訳『ニードフル・シングス』

ある方が、こんなことをおっしゃっていました。「洋書を読める人が多くなったこの時代、情報を早く正確に取り入れるには原書を読めばよい。ならば翻訳書を世に出す理由はどこにあるのだろう。こたえは単純で、本を手取る人に母国語で読みたいという欲求があるからだ。英語を読み、理解することのできる日本人はごまんといふ。しかしその文章から一步踏み出して、味わいながら読むことのできる日本人となるとそう多くはいないだろう」。

そういえばとうなずけるような読書体験が自分にもあったので、お話の意味がなんとなくわかるような気がしました。それから何日か経ったある日、本を読んでいると「わかるような気」がひとつの確信にかわりました。そのとき手にしていた本というのが、芝山幹郎訳『ニードフル・シングス』です。原文と照らし合わせて読んだときの衝撃をどう表現したらよいものでしょうか。ここはひとつ、わずらわしい御託をならべるまえに例を挙げて、その衝撃を存分に味わっていただきましょう。

She went to bed that Thursday night planning to go over to Nettie Cobb's first thing Friday morning and Take Care of Things. Her frequent wrangles sometimes simply faded away, but on those occasions when they came to a head, it was Wilma who picked the duelling ground and chose the weapons. (原文ペーパーバック版 p153)

あの木曜の夜、ウィルマは、翌朝一番にネットィ・コップの家へ出かけてカタをつける計画を練りながらベッドに入った。ウィルマは、しょっちゅう人と口論をはじめてしまう人間だが、そうしたいさかいは、うやむやのうちに立ち消えになることがめずらしくない。しかし口論が昂じて双方の頭に血がのぼった場合、決闘の場を指定し、闘いの武器を選ぶのはかならずウィルマのほうだった。

(スティーブン・キング著芝山幹郎訳『ニードフル・シングス』文春文庫上巻 p284)

英文和訳のテストならば、ひょっとして×がつくかもしれませんが。そう思えるほど芝山氏の訳文には原文の文構造がすこしも反映されていないのです。しかしじっくり読んでいくと、むしろ元の文構造を反映する必要などない見事な文章であることに驚き、息をのみます。原文がいわんとするイメージをナイフでざっくり切り取ってきたかのように訳文が再現

しているからです。

一文目は分詞構文を抱えた、しごく簡単な<S + V>の第1文型です。しかしいざ自分で訳してみようとする、これがなかなか容易ではありません。直訳調に訳せば、「金曜の朝にまずにネットィ・コップの家に向こうと計画しながら、彼女は木曜の夜ベッドに入った」とでもなりましょう。定期試験の回答ならばまずまず及第であるはず。しかしこの日本語は一読しただけで意味を伝える域までには達していません。明らかに読み手のもとに原文が置かれているのを想定している訳文です。こういった文章の本を丸一冊読まなければならぬとしたら、読書はもう娯楽ではなく苦痛でしかありません。

芝山氏の訳文では<Friday morning>が「翌朝」と訳されています。たしかに日本語の小説であればこういう書き方をするのが普通でしょう。日本語で「木曜の夜」、「金曜の朝」とあえて細かく書いてある場合は、そこになんらかの特別な意味が付加されているものです。事実を整理している場面であるとか、曜日を確認している場面であれば、まずこういった言いまわしが用いられることはありません。外国語をきちんとした日本語に訳するのが容易でないのはこういった言いまわしの差異によるところが少なくありません。しかしその垣根を飛び越えて、ぐいと日本語に引き寄せた訳文は、一般的に新人翻訳者には許されないといわれております。解釈をおもてに出すことは誤訳の危険性がそれだけ高まるからです。ベテランであっても相当の自信がなくてはできない大勝負なのだそうなのです。しかし芝山訳『ニードフル・シングス』では母国語を真ん中にすえた思い切りのよい文章で、キングの言葉が訳されています。

芝山訳を読んでいると、翻訳とは英語を読む仕事ではなく、日本語を書く仕事だということを実感します。無生物主語<Her frequent wrangles>は、「ウィルマはしょっちゅう人と口論をはじめてしまう人間だが」という言葉の運びになっています。また次の文章の<It was Wilma who...>の強調構文は「かならずウィルマだった」という副詞を用いた表現にかえられています。戦後以降、無生物主語は日本語の文章として急速に認知されてきました。とはいえ縦横無尽に使いまわされる慣用表現とまでは熟成されていません。強調構文の概念にいたっては日本語として成立していません。芝山訳では、こういった日本語にならない要素を持つ英文が、日本語にしっかりと馴染む、時間の試練に耐え抜かれた表現にことごとく置

き換えられています。言葉だけでなく、文構造にまでメスが入れられているのです。文庫本上下巻で 1300 ページを超える長編小説が、一貫してこんなふうに訳されています。付け焼刃の翻訳とは次元のことなる圧巻な文章。読む者はみなキングの世界にいざなわれ、気がつけば本を閉じることができなくなっています。

動詞の訳も独特です。<faded away>は「うやむやのうちに立ち消えになる」と表現されています。芝山訳を読んでいて思わず唸ってしまうのは、こういう豊かな表現を目の当たりにしたときです。<on those occasions when they came to a head>という副詞句は、「口論が昂じて双方の頭に血がのぼった場合」と訳されています。原文のシンプルな表現に比べ、訳文は訳者の解釈が反映された、かなり踏み込んだものになっています。ここで喧嘩の話であることがきちんと印象づけられているため、読者はこの後に続く文章の誇張表現に対して違和感を持たずに読みすすめていくことができます。この場面が原文どおりそっけなく訳されていたら、うしろに続く「決闘の場」や「闘いの武器」の意味が定まらず、違和感が生じていたでしょう。訳者がきちんと解釈を打ち出すことで、読者が物語を楽しむことのみ集中できるよう配慮された訳文です。

では、もうひとつ例を挙げてみたいと思います。

He'd hoped for some modulation of temperament overnight, but when Wilma got up the next morning, she was even angrier. He wouldn't have believed it possible, but it seemed it was. The dark circle under her eyes were a proclamation of the sleepless night she had spent.
(原文ペーパーバック版 p155)

一晩寝れば癩癩もすこしはおさまるのではないかと、ピートは淡い期待をかけた。しかし翌朝めざめたウィルマは、いっそう怒りをつのらせていた。そんなことがありうるなんてとても信じられなかったが、現実にはそうだったのだから仕方がない。眼のまわりにできた黒い隈は、ウィルマがひと晩中まんじりとしなかつたことを告げていた。
(上巻 p289)

とかく「期待」の一言で片づけられがちな <hope> は「淡い期待をかけた」という表現になっています。名詞 <some modulation of temperament> は「癩癩もすこしはおさまるのではないかと」と述語のように訳され、さらりと心地よく読むことができます。名詞という動かぬ塊が動詞に置き換えられているため、読者は意識の流れを遮断されることなく、素直に読みすすめることができるのです。<when> を用いた複文は

「翌朝めざめたウィルマは」と、副詞句を被修飾語である名詞として処理し、簡潔に仕上げられています。比較級の <angrier> は「つものらせる」という和語で情感が演出され、鼻につく英語臭があとかたもなく消えています。

<He wouldn't have believe it possible, but it seemed it was.> は一見、平易な単語の連なりのようであり、拒絶の助動詞、第 5 文型、文尾の省略を盛り込んだ難しい文章です。そんな原文が、読んでいておもわずぶっと吹き出してしまうような日本語に昇華されています。

<The dark circle> を主語にもつ文章も、これまで無生物主語を極力抑えたかいて、ここぞとばかりに効果が際立ち、情景を喚起させる文章になっています。<a proclamation of the sleepless night she had spent> の部分では、省略された関係代名詞が先行詞を修飾しています。日本語にはまず存在しない形容方法ですが、これ以外の訳はありえない、びたりとはまる日本語になっています。「まんじり」という表現を紡ぎだす研ぎ澄まされた語感にも、憧れを抱かずにはいられません。

文構造がぐっと日本語に引き寄せられていること。描写がほろりと繊細であること。芝山訳『ニードフル・シングス』を原書と照らし合わせるとこのふたつの点に気づきます。英語特有の言いまわしが、圧倒的な力技を成し遂げる翻訳者に濾過され、さりげない日本語に生まれかわっています。読者はその恩恵にあずかり、本を読む楽しさにどっぷりと浸かることができます。

日本語の持つ懐の広さが外国語を消化し、読書人に新鮮な感情を呼び起こします。芝山氏の訳された『ニードフル・シングス』はまさにそれを体現した一冊です。舶来の書物を手にすることが容易となった時代に、海を越えてきた文化を母国語で味わうことができる。現代の翻訳書を読む者にとって、これ以上の贅沢はありません。

齋藤兆史著『英語達人塾』

誤訳を論ずるとなると、鬼の首をとったかのごとき執筆者のひとりにはしゃぎか、陰湿な嫉妬・いじめになりがちだ。他人の誤訳の指摘ほど易しいものはなく、自分の誤訳の根絶ほど難しいものはないのを認めたくて、ここはひとつ「お互い自分の恥ずかしい誤訳を見せあって笑い飛ばす場があったらよい」との河盛好蔵の言を是とし、翻訳関係者の滋養強壮になるよう、翻訳まわりの諸問題を前向きに考えてゆきたい。

その第一回は『英語達人塾』(齋藤兆史、中公新書)

第4章で著者(東大大学院総合文化研究科助教授)はこのように述べる。

従来の文法・読解中心の教育が(少なくとも一般的な英語学習者にとって)効果を上げなかったとすれば、それは文法・読解の訓練が不十分だったからである。(p41)

最近の英語教育では、学習者が文法を身につける前から文章の大意を理解する読み方を推奨する傾向にあるが、これは本末転倒もはなはだしい。文法を正確に読み解く訓練をしているうちに、しだいに文法が気にならなくなって文意がさっと頭に入るようになる。これが正しい学習の順序である。(p49)

よくぞ言ってくれた。私なぞも同じようなことを主張しているのだが、由緒正しい、マスコミにも受けのよい大学語学教員が声を大にしていわねば、世間は聞いてくれないのである。ほかの教員諸氏も齋藤に倣って正しい英語の学び方を啓蒙してほしいものだ。

だがまえがきにある次の文言にちょっとひっかかった。

とりあえず国際的な会議で発表や討論を行うばかりでなく、日本の大学で英語を教えたり、文学作品の翻訳をする程度の英語力は身につくはずだと言っておこう。(下線部は私が記した)

英語力の目安を示しているだけだといわれるかもしれないが、日本語力への言及なく翻訳の力を云々するのはうれしくないな...、そう思ってざっと目を通すと、気になる個所が四つでてきた。

forの説明が納得ゆかない

・齋藤兆史の文(p50~54)

このfor(註:p37のカズオ・イシグロ『わたしたちが孤児だったころ』よりの引用部分)は、通例コンマのあとに置かれ、前に言ったことに対する証拠または説明を追加する役割を果たす等位接続詞である。はじめから意図して直接の理由を述べるときに用いられる従属接続詞のbecauseとは用法がまったく異なるので注意を要する。(中略)

先述の齋藤秀三郎の『実用英文典』では、forとbecauseの違いが次のように説明されている。

For--becauseが心理的・物理的原因を挙げるときに用いられるのに対し、forは論理的な理由を挙げるときに用いられる。

川の水位が上がっている。なぜならば最近雨がたくさん降ったからだ。

最近雨がたくさん降ったに違いない。それというのも川の水位がとても高くなっているからだ。

Forは先に述べたことに対する説明や理由づけをする。結論がつねに先に述べられていることに注意。

(上述のasと比較せよ)

私はすぐに仕事に取りかかることができない。なぜならば旅に出るところだからだ。

[齋藤兆史の訳(齋藤秀三郎の英原文は下記)]

For--"Because" assigns a moral or physical cause. "For" assigns a logical reason.

The river has risen, *because* it has rained much of late.

It must have rained much of late, *for* the river is so high.

"For" explains or accounts for what precedes; the consequence is always stated first. (compare "As," "above.")

I am not able to begin the work at once, *for* I am about to start on a journey.

なんという明快な説明だろうか。外国の英文法書のなかにも、これだけわかりやすい接続詞forの用法を解説しているものは多くない。

(中略)

ところが、面白いことに、この二つの接続詞の用法の違いを知らない母語話者は意外なほどに多い。

(中略)

さらに because は、日本語の『だって』と同じように、さほど厳密な因果関係を示さないつなぎの言葉として用いられる傾向にあり、ときとして It's interesting because ...のように、仮主語 it の内容を導くような形で用いられることもある。

(中略)

日本人はややもすると母語話者が話しているものが本物の英語で、学校の英文法の授業で習うのがにせものの英語だと単純に決めつける傾向があるが、母語話者が正しい規範文法を知らない場合もけっこう多いのである。

・私(柴田)の意見

「なんという明快な説明だろうか」と兆史(以下この項、両齋藤を名前と呼ぶ)はいうが、私にはわかりにくい。そもそも兆史の冒頭での「この for は...注意を要する」との説明と、兆史が褒め上げる秀三郎の「For--because...ときに用いられる」の説明が頭の中でひとつにならない。お前の頭が悪いからだといわれればそれまでだが、新書で出すからには、頭の悪い人間にもわかる説明でなければならないはずだ。

秀三郎の「For--because が心理的・物的原因を挙げるときに用いられるのに対し、for は論理的な理由をあげる」という説明は、私が英文を読んでいて感じるのとは逆だ。

この説明を認めたところで、兆史の「さらに because は、日本語の『だって』と同じように、さほど厳密な因果関係を示さないつなぎの言葉として用いられる傾向にあり、...」にとまどってしまう。for にこそ「だって」という語感があることが度々だからだ。それは「母語話者が正しい規範文法を知らない」場合だ、と齋藤はいうかも知れない。

ならば、次の例文を見てもらおう。

I might have been incredulous had I not been accustomed to such responses, for long ago I became convinced that the seeing see little.

この for は確かに前節の理由を説明するが、論理的とはいえまい。この種の for が多くて翻訳には困るのだ。

直訳すると：このような答えに慣れていなかったら、きっと信じられなかったことでしょう。それというのもずっと前に私は眼の見える人はほとんど何もみえないのを確信していたからです。

because は 因果が明確 直接的
for は 因果が弱い 付随的

これぐらいのザクツとした認識をした上で、あとは文の前後関係から訳語を選ぶしかないとは私に思っている。

直訳を裏から読んで：答えに慣れていたので信じました。というのも正眼者はなにも見ていないのを知っていたからです。

意識してみる：眼のみえる人は何もみえていないのが前から判っているからいいようなものの、こんな答えに慣れていなかったらきっと、ウソをついているのだと思ったことだろう。

Meanwhile time runs by and is gone, and I am none the worse. For you cannot imagine how much ease and comfort I draw from the thought that they are beside me, to give me pleasure when I choose.

この for など全く因果関係を持たず、「だって...なんだもの」「...ってことあるじゃないですか」の感じだ。どうやっても、直訳では文意が成り立たない。

意識：そのまま日は去り月はゆくが、何がどうなるわけでない。わかっていただけだろうか。本がいつもそばにあって、読もうと決めればいつでも満ち足りた気分になれると思うだけで、わたしの心はおおいに安らぐのだ。

この二つ、前者はヘレン・ケラーの文章、後者はモンテニユの英訳で、いいかげんな英文であろうはずはない。

because と for で規範文法と一般英語の誤差を説明するのは無理ではないだろうか。

セミコロンと and が一緒に使えないなんてホント？

・齋藤兆史の文(p108,109)

[セミコロン(;)の用法]

用法 等位接続詞的に独立した節同士をつなぐ。

There was a long pause before he opened his mouth again; the audience remained silent.

彼が再び口を開くまでにかかなりの時間が経ち、[そして]聴衆は静まり返ったままであった。

(中略)

* 第1の用例で見たとおり、セミコロンは等位接続詞的な機能を果たすため、通例、等位接続詞とは共起しない(=一緒に用いられない)が、接続詞的

な機能を持った副詞(句)とは共起する。

・私の意見

セミコロンと等位接続詞 (and,but,yet,for など) が一緒に用いられるのは名文家の文章から抜粋した次の例で明らか。再考を願いたい。

More than once I was driven by necessity to beg from strangers the means of earnings bread, and this of my experiences was the bitterest; yet I think I should have found it worse still to incur a debt to some friend or comrade.

(一度ならず、やむを得ずしてして他人に生活の資を乞うたこともあります。それは私の体験のなかでも一番嫌なものでした。けれど友人知人に借金をしていたならば、それよりもっと辛く思ったに違いありません)

All have vanished now; and the housewife betakes herself to the stores.

(いまそうしたものは全て姿を消してしまった。それで主婦はデパートへと買い物に出かけるのだ)

The mind may accumulate large stores of knowledge without any useful purpose; but the knowledge must be allied to goodness and wisdom, and embodied in upright character, else it is naught.

(人は何ら有効な目的を考えずに膨大な量の知識を蓄えることがある。だがその知識は徳性と英知に結びつき、高潔な人格をつくりださねばならない。でなければ知識は無意味なものでしかない)

Anything that applies to the daily shuttling of people to and from the center of the metropolis applies equally to the transportation of goods; for congestion not merely slows down the passage of goods through the streets but also increases the time needed for unloading; and both raise the cost.

(都心部への通勤についていえることが、すべからず商品輸送に関してもいえる。渋滞は商品の路面での輸送を遅らせるだけでなく、荷おろしにかかる時間をふやし、結局はコストにはねかえる)

言語学者は得てして語感が鈍い

・斎藤兆史の文(p76)

名文例 1 - - Bertrand Russell, The Conquest of Happiness(1930)より

The happy man is the man who lives objectively, who has free affections and wide interest, who secures his

happiness through these interests and affections and through the fact that they, in turn, make him an object of interest and affection to many others.

幸福な人とは、客観的な生き方ができる人、闊達な愛情と広範な興味を抱いている人であり、またそのような興味と愛情を通じて、そして今度はそれを抱いているがゆえに自分が多くの人にとって興味と愛情の対象になっているという事実によって、自らの幸福を手に入れることができる人である。[拙訳]

・私の意見

この[拙訳]とは斎藤の訳だが、本人がへりくだるまでもなく、拙い訳だ。

かねてから思っているのだが英文学者は英語ができず、英語学者は日本語ができない。

もしや両方できる学者の出現かと齋藤に期待したのだが、「文学作品の翻訳をする程度の英語力」なる表現でいぶかった私の予感があたり、このひとは後者に属するようだ。

文体論を専攻として標榜するからには、きちんとした日本語が書けねばなるまい。

「客観的な生き方」では、日本語として意味が通らない。いや原文にそう書いてあるからいいのだ、では困る。後書きで齋藤自身、「意味素」「意味成分」なる考え方を翻訳に導入するとよいと、いつているのだから。

英英辞書を引こう。

Longman: objectively

If you consider something objectively, you try to think about it without being influenced by your own feelings or opinions.

Cobuild: objectively

We simply want to inform people objectively about events all over Yugoslavia.

Try to view situations more objectively, especially with regard to work.

objectively とは「その場の感情や自分の固定観念にとらわれない冷静さ」をいうのがわかる。

訳としては、多少の誤差を覚悟で(原著者だったらどのような日本語を使うか考えて)、「先入観をもたない」「物をきめつけない」「安定した心持」などするのがよいだろう。

「闊達」は「ものにとらわれない/生き生きした」の意味ではあるが、「愛情」とは言葉の結びつきが悪

い(闊達な愛情、とは言わない)。

これに目をつぶったにしても、

「闊達な愛情」と「広範な興味」を並列させ「抱く」に掛けるのはきわめて不安定。

「愛情」には、何に対するという目的語が問われるが、「興味」は目的語なしでも存立できるからだ。

in turn「今度は」では、順番があるように読み手は思ってしまう。同時性だとわかるように「逆に」とでもしてはどうか。

文体論には期待したいが...

・斎藤兆史の文(p162,163)

具体的な翻訳にあたっての技術は、とてもここでは書き尽くせないが、一つだけ、文体論を応用した翻訳の技法を紹介しておく。それは、語彙単位ではなく意味素や意味成分単位で訳す、あるいは意味素・意味成分を組み換えるという技法である。言語学や文体論で言うところの「意味素」、「意味成分」とは、語彙や単語よりもさらに小さい意味の単位を指す。たとえば export「輸出する」という単語の意味は、接頭辞 ex-の「外に」と語幹 port の「運ぶ」という意味素から成り立っており、boy は「人間」「オス」「子供」という意味成分に分解できる。英文を日本語に訳すときにこのような小さい単位を組み換えて訳すと、比較的自然的な日本語になる。

たとえば、まず『英語達人列伝』の「野口英世」の章で引用した次の英文を例に取ろう。

He was a shy thoughtful boy, shrinking generally from rough companions, but with the hot temper of his race.
(James Anthony Froude, Thomas Carlyle, 1901)

(中略) shy, thoughtful をそれぞれ個別に辞書で引けば、定義的な意味として「恥ずかしがり屋の、内気な」、「思索する；思慮深い」などが出ている。だが、それを単語単位で訳し換えた「恥ずかしがり屋で思慮深い少年」はいかにも翻訳口調で、日本語として不自然だ。そこで僕は、それを「引っ込み思案な少年」と訳した。すなわち、日本語の「引っ込み思案」という一つの語彙項目には、shy と thoughtful がそれぞれ持っている主要な意味成分が含まれていると判断したからである。

・私の意見

「意味素」「意味成分」などと、学術用語に幻惑されそうだが、私たち翻訳者が日常意識せずにやっていることだ。でもそれを論理化してくれるのはありがたい。翻訳作業に付きまとう、何か元と違うものをこしらえているのではないかという、後ろめたさを払拭してくれるからだ。「恥ずかしがり屋で思慮深い少年」が「日本語として不自然」と感じるセンスがあるなら、

先の「客観的」についても少し考えてほしかった。

shy thoughtful が「引っ込み思案」でそれぞれの単語の意味成分を充足させていると考えるのは疑問だ。

そこで広辞苑を引くと、
引っ込み思案：進んで物事をしたり、人前に出たりする元気にとぼしいこと。またそのような態度や性質。

shy にはあてはまるが、thoughtful の意味は含まれていないようだ。ならば斎藤のアドバイスに従い、thoughtful を意味素に分解してみる。

thought は(狭くとると)熟考、思案；(広くとると)思索。

-ful は、

(1)...に満ちた：We are hopeful about the future.

(我々は未来に希望を抱いている)

(2)...の性質のある：a forgetful person

(忘れっぽい人)

(3)...を引き起こす：It is harmful to the health to sit up late at night.

(夜更かしは健康によくはない)

ここは(2)があてはまりそうだ。

すると shy(引っ込み思案)で thoughtful(思索の性質ある)少年ということになるが、さあこれを自然的な日本語でどういったらよいか。ここからが翻訳の問題で、訳者の文体と思い切りにもよるところとなろうが、私ならざっくり訳すのが好きなので「おとなしいが利発な(少年)」。読者は如何だろう。

さて私からの斎藤に送る言葉。

まず文体論なるものが一時のものめずらしさで消えてしまうことのないように、さらなる精進と理論の発展を望む。次に語感を磨いて、文体論を体現した翻訳のできる学者になってほしい。